

連載

say

かごしま

心の特産品

国道二二六号線の生見を過ぎ、観音崎にさしかかると、海沿いに松がよきよき立っている。腰の入った立ち姿だ。松原ごしに錦江湾と知林が島や大隅の山々が見える。ふりかえれば、桜島がおっとりそびえている。

息を飲むような絶景ではないが、ほっとひと息つきたくなる。凡常の名景だ。観音崎の松は指宿の門掛け松だ、と私は思っている。ここを過ぎると、今和泉だ。今ここは天璋院篤姫の出跡として注目されている。地元も熱くなっている。これはこれで結構なことだ。しかし、と今回のちよびりあやかり商法への苦言を。



大河ドラマというのは自分たちが作り出した価値というより、与えられたきつかけなんですね。むろん地域浮揚のためには、どんなきつかけでも利用すべきです。

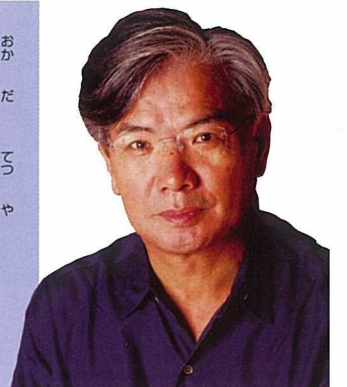
ところがそれをものにするには、これ見よがしでなく、人知れぬ努力がいるものだ。それもなしに、チャンスチャンスと鬼の首でもとつたみたいに色めきたつのは、ヤラズブツクリだと思う。縁日商売と同じだ。もちろん『翔ぶが如く』の時とは、受け入れ方もてなし方も、格段上手になっているかもしれないけど…。

ただ、一年でのしあがったものは、得てして二年でぼしやるものだ。それでもイイ、という人もいい。だが私は、据え膳にあずかる時や人の評判にあやかる時は、ちよびり謙虚に振る舞うのが好きだ。そして、たとえ誰も振り向く人がいない時でも、腐らず黙々と自分の魅力を磨き続ける生き方ややり方も気に入っている。

流行に便乗したテレビ番組、テレビに便乗した旅行者、旅行者に便乗した観光客、それに便乗した商売もある。しかし、なかには温泉に浸ると同じくらい、鹿児島風の風光に浸りたいという人もいる。焼酎に酔うのと同じくらい、鹿児島と文化と文化に酔いたいという人もいる。歴史と文化といえはしちめんどうだが、なんのことはない。「ああここから篤姫や西郷は、桜島を眺めたのだなあ」。こんな気持ちにさせることだ。鹿児島風の風景を五感で感じ、風物や人情を五感で味わう人である。こんな人が根強いファンになる。

であればあるほど、よそとは違った鹿児島な

第四回 風光の魅力と人間の努力



おかだ とうや
岡田 哲也

1947年、出水市生まれ。東京大学中退。詩集「海の陽山の陰」に『ほん子守唄』、現代詩人文庫「岡田哲也集」エッセイ集に『不知火紀行』『夢のつづき』など多数。

近著の物語「川がき 春」が好評発売中
南日本文学賞受賞。
平成4年度県芸術奨励賞受賞。

らではの魅力と努力がものを言う。しかし私たちはどうもよその真似をしたり、エエトコドリをすることになり躍起になりすぎるきらいがある。それが進んでることだと思いたがる。そして一番大事なものを捨てている。私の周囲のがんばり屋さんの中には、ドラマや新幹線の話のたびに、起爆剤と口走る人もいる。しかし、爆発するのは火の山だけでいいんですね。こちらの欲と皮算用の爆発に、よその人を道連れにするのは、自爆テロみたいで品がない。

時に革めることにも心血を注ぎ、時に変わらぬことにも懸命になる。自分は黙っていても、他人がほっとかない。そんな人や所が、鹿児島に増えたらイイなあと思う。